

令和2年度 モアショロ原野螺湾足寄停車場線
モアショロ原野地区の環境影響に関するワークショップ（第2回）

【 議 事 概 要 】

日時：令和3年3月23日（火）13：30～15：30

場所：とちがね 孔雀の間（2階）

出席者：《ワークショップ参加団体》

団体名	氏名	備考
帯広ウチダザリガニ・バスターズ	鏡 坦	
川と河畔林を考える会	高倉 裕一	
雌阿寒自然塾	岩原 榮	
日本野鳥の会十勝支部	飯嶋 良朗	懇談会構成員
十勝川水系の生態系再生実行委員会	石垣 章	懇談会構成員

《有識者構成員》

氏名	専門分野	所属等
加賀屋 誠一（座長）	自然災害科学、都市工学	北海道大学 名誉教授
柳川 久	野生動物管理学	国立大学法人帯広畜産大学 副学長
山本 純郎	鳥類（シマフクロウ）	環境省シマフクロウ保護増殖委員
飯嶋 良朗	鳥類（一般鳥類）	日本野鳥の会十勝支部 監査
持田 誠	植物	浦幌町立博物館 学芸員
澤村 寛	地質	足寄町動物化石博物館 特任学芸員
石垣 章	淡水魚類	十勝川の生態系再生実行委員会

《オブザーバー》

氏名	所属等
上村 兼輔	環境省 釧路自然環境事務所 阿寒湖自然保護官事務所 国立公園管理官
高久 雄太	北海道森林管理局 十勝東部森林管理署 森林整備官
村石 靖	足寄町役場経済課商工観光振興室 室長
岩淵 堅志	足寄町役場建設課建設室 室長

《帯広建設管理部》

氏名	所属等
橋本 雄太	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室長
寺越 孝則	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室地域調整課 地域調整課長
川尻 利行	十勝総合振興局帯広建設管理部 足寄出張所 所長
井馬 俊安	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 道路課長
三城 圭吾	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 主査（道路）
和田 昭一	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 主幹
深澤 亮雄	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室事業課 主査（道路第4）
古川 友啓	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室事業課 技師

令和2年度 一般道道モアショロ原野螺湾足寄停車場線
モアショロ原野地区の環境影響に関するワークショップ（第2回）

日 時 : 令和3年3月23日（火） 13:30~15:30

場 所 : とかち館 孔雀の間（2階）

次 第

- 1 開 会
 - 2 参加者紹介
 - 3 ワークショップ設置要領について
 - 4 あいさつ
 - 5 事業経過
 - 6 令和2年度 第1回WS開催時質問・意見について
 - 7 令和2年度 自然環境調査結果及び令和3年度調査計画
 - 1) 植物：(株)ズコーシャ
 - 2) 鳥類：(株)北開水エココンサルタント
 - 8 令和3年度 事業計画について
 - 9 意見交換
 - 10 閉会挨拶
- ・ 資料-1 懇談会設置要領
 - ・ 資料-2 懇談会の公開について
 - ・ 資料-3 懇談会の公開について（別紙）
 - ・ 資料-4 ワークショップ設置要領
 - ・ 資料-5 構成員名簿
 - ・ 資料-6 参加団体名簿
 - ・ 資料-7 説明資料（事業経過、R2 第1回 WS 開催時質問・意見について、
R2 年度自然環境調査結果及び令和3年度調査計画、
事業計画について）

ワークショップ 意見交換会

「火山防災について」

高倉：

- ・これからの調査や工事、道路完成後の色々な対応とうまく合致した進め方、町民の防災の動きも含めて総合的な視点での進め方が必要でないか。
- ・ハザードマップが町民に配られた、そこから先が大事である。ハザードマップに表現された種々の考えられること、それに対する対応を町と町民と科学者と一体となって、共有していくかが大事である。
- ・十勝岳の望岳台に非常に強固で立派なシェルターが数年前に作られました。そういうものを防災協議会でどのように検討されているのか。並行して確実に2年後でも3年後でも予測のできない噴火に対する対応を考えつつ、道路と一緒に検討して進めていかないとならないのではないのか。

建設管理部：

- ・十勝総合振興局の関係者と、モアショロワークショップの情報共有を今後もしていきたいと思っています。また、足寄町とも連携し打合わせ等を行いながら情報共有をしていきたいと思えます。

座長：

- ・どのように道路を使っていくか、今から検討していかなければならないかもしれない。ただ、現状でどういう状況にあって、どうすれば避難が完全にできるかということをおおまかじめ考えておくということは大事だと思います。
- ・防災ガイドマップをできるだけ町民の皆さんが密に接触して、これについて常に考えていく、そして「いつもこういうことに備えなければならない」ということを、是非喚起していただくことが大事だと思います。
- ・有珠山等、同じ火山がある町で、色々な形でその情報を共有しながら、参考になる部分はその先進事例を使って、これからこういう形のもの（防災ガイドマップ）を利用していければと思います。
- ・シェルターについては、実際に十勝岳でそういったものができたということであれば、それもどのような形で実現可能なのかを検討していただくことも大事かと思う。是非その辺も北海道と実際の省庁さんとの間で検討していただくことが必要かなと思います。

「クマタカについて」

飯嶋：

- ・クマタカの営巣木ですが、多分、このエリアではいなかったのだと思います。大変な貴重種ですので調査は事あるごとにして頂ければと思います。
- ・調査を進めていますと色々思わぬ種が出てくることがありますので、国や北海道に工事の前後だけでなく工事区だけでなく、こういう資料を常に準備するような姿勢を取っていただくことを願っております。

座長：

- ・クマタカは今のところ営巣木がないという状況です。今後共いろんな形で調査はやっていくような形になっておりますので、新しい情報が出てきた時に対応していくことにしたいと思います。

・新しい種類、鳥類もかなり出てきていることで、新しい種類の鳥類が出てくるのが今後あり得るのかどうか、その可能性について少しお話いただければ。

北開水工：

・これまでもかなり調査の回数を重ねてきている中で、年間数種ずつ新たな確認種が増えている状況です。重要種に限らず一般鳥類の中では例えば、メジロなどが今年は新規に確認されています。道内でも鳥類の分布の変化に応じて、新たな種が確認されてくる可能性は十分あると思っております。

「クサヨシについて」

持田：

・岡村先生からのご指摘にありますように、クサヨシは北海道の在来種なのか、牧草起源種なのかというのが非常に難しく、実際の判別はなかなか困難ではないかと言われています。北海道では、相当山奥にまで生えています。これを在来種と言い切れるかどうか確かにまだ結論が出ていません。

・今回、いろいろ調べていただいたものから対象種の候補のリストを見てみると、様々な侵略的外来種の侵入を抑制するために、いち早く法面の緑化を実現するための対象種を考えると、候補となる種は、どれも比較的弱いと思っています。これに代替する種で、現地に対応するものはやはりクサヨシくらいしかないのかなと思います。ススキ、オギの類のイネ科があると良いと思いますが、今回の地点では多分得られることは難しいということであれば、最終的にはクサヨシの活用というのは念頭に置いた方がいいだろうと思います。

「住民協働による環境保全について」

岩原：

・私達の塾も10年以上、火山塾を開いております。それは防災ではありません。雌阿寒岳そのものを皆さんで勉強しましょうということで、火山の知識を知りながら山を楽しんでいただきたいという気持ちで進めてきたところでもあります。今後、その知識を含めて、色々な意味で地域の皆さんと協力していく、私たちも参加していくという思いでいます。

・かなり外来種があるということですので、これらをどうするかが今後の課題だと思います。先程、住民協働、活動を進めたいということがありましたけれど、私たちも雌阿寒自然塾を中心に、新たな団体になるかもしれませんけれども、そういった思いでこういったところに携わっていければと思います。いずれにしても私達のできることは限りがありますので周りの地域と連携を取りながら進めていくことが大事ではないかと思っています。

座長：

・こういう形で外来種の駆除を取り入れて住民運動としてやるのが可能であれば、おそらく全国的にもこういう例はないと思います。ですからこのワークショップの中でもこれを全面的にバックアップしながら実現していければと思います。先程、北海道のお話ですと令和4年度からこれをやっていければというお話でしたので、そういうことからこの辺は非常に力を入れてやっていく必要があると感じました。

「地滑り対策について」

高倉：

・北海道知事の回答の中で「現道を利用する場合、大規模な地滑り対策が必要になると考えています。」とある。雌阿寒岳の噴火を想定した中で、現道周辺でどのような大規模な地滑りを予測しているのかについて、次回で結構ですので説明をお願いします。

火山噴火に伴う大規模な地滑り対策が必要になると考えている、ということ、現道ではなく新道、私たちが今検討している新道周辺ではここで言うような大規模な地滑りが想定されているのか、いないのか、どの様に検討されているのか。次回、是非教えてください。

建設管理部：

・詳細については次回、回答させていただきたいと思います。現道の周辺については地質調査の結果、地滑りの地形があると分かっております。また、同じように今のルートの中では地滑りについてその様な地形があるということにはなっておりません。詳細については次回に説明させていただきたい。宜しくお願いします。

座長：

・これについては地質調査等でデータがかなりあると思いますので、それを見れば地滑りがあるか否かがわかる。次回データがあれば出して頂ければと思います。

「外来種駆除について」

田村：

・アメリカオニアザミは、焼き払うか土ごと完全に採集しなければ、ただ刈り取ったり表面をむしり取ったりしただけでは処理できないのではないかと思います。

建設管理部：

・この駆除方法なのですがまだ案としていまして、令和3年度、試験施工します。先生の話をお聞きして2年草なので難しいなど。そのへん来年試験的にやってみたいと思います。

持田：

・アメリカオニアザミの駆除の実例を調べたところ、北海道農業試験所が数年前実施していて、その知見を見ると2年草で単に1年目に地表を刈り取るだけでは効果は低い。開花した後に根元から切ってしまうと再生はしてこない。再生する確率はかなり低くなるということが解っている。その後、刈り取ったものを持ち去って焼却処分する。あとは、初期の侵入を抑えるために他の植物をいち早く導入する。この2点がポイントだと思います。

・アメリカオニアザミについては全身が強烈的な棘で覆われているので、市民参加で処理するのは難しい、事業として何らかの形で対策をとる必要があると思います。

「鳥類について」

山本：

・夜間調査をやっていますけれど、ボイスレコーダーの結果はどのようなのですか？

北開水工：

・録音した結果については波形を含めて確認はしています。フクロウ類についてはこれまで確認はございません。

山本：

・植生や地形を見ていると小型のフクロウがかなり居ると思います。よく鳴きますから、キンメフクロウなんかはそうなのですが。私は好きではないですけどコールバックすればかなり出てくる。ですから、今言われている以上にたくさん渡ってきていると思います。一部は繁殖してくると思うので、そのあたりを十分注意して観てください。

柳川：

・一般論として、鳥を含めてですけど、重要種がこれからそれほど増えないでしょうけど、減ることもないわけですね。重要種が出てきたときにどう考えるかということで。例えばタンチョウですけど、畜産大学で私がこの職について5年なのですけど2回記録されている。5年間で2回、何か気を付けなければならぬか、そういう見極めが直ぐできるかどうか。短い限られた期間の調査で難しいかもしれないですけど、ある程度重要種が見つかって、何故それが見つかったのかという見極めの上で、いろいろ対策を考えていくのが一番効率的かと思いますので、その辺を念頭に置いていただければと思います。

加賀屋：

・タンチョウはいろんなところで目撃が多いようで、全道に広がってきつつあるのかという感じがします。私たちこの地域にとっても大事なポイントになると思うので、どういう形で考えていくのかということも含めて、今、先生がおっしゃった考え方も皆さんで検討していただければと思います。

持田：

・タンチョウが最近確認されてきているということですが、平成27年か28年は聞き取り調査が行われています。あの辺で繁殖したりするのであれば、近くの農家やオンネトーの方とか、声を聞いたり見たりすると思う。来年度聞き取りなどの調査を行えばデータを得られると思うのですが、その予定はありますか。

北開水工：

・計画の中にはそのような聞き取り調査の予定は特にないのですが、現地調査に随行頂いたハンターさんから、螺湾地区でタンチョウを見かけると聞いているので、おそらく聞き取りをすることで情報を得ることはできると思います。

「種子発芽試験について」

持田：

・発芽試験の所でサハリイトスゲは結実があったということなのですが。種子の採取時期がサハリイトスゲは少し早いですが、現地の段階で結実そのものをしなかったという理解で良いですか。

ズコーシャ：

・ごく一部は結実していましたが、ほとんどは確認できなかった。春から秋まで、結構頻繁に現地に行きました。その中で、なかったのが、今年が特別にそんな年だったのかもしれませんが確認できなかったということです。

持田：

・逆に言うと、栄養繁殖で定着した場合は、長くずっとそこにあるという可能性の方が高い。発芽はしないけれど、移植した場合に定着する可能性はあるのかもしれない。穂も上がっていないのか？上がっていないであれば多年草なので種子繁殖を穂はあまりとらないという戦略姿勢であ

る可能性が高い。移植の可能性はなくはない。発芽試験の国際検定だと、発芽率のほかに一定の発芽締切日の間にどのくらい発芽したかという発芽勢(はつがぜい)というのが多分あると思います。これに対して数字的なものは結構ですが、何かありますか。

ズコーシャ :

- ・今細かいデータが無いので後ほどお答えします。

「法面緑化について」

持田 :

・緑化選定種については草本・木本の組み合わせで最終的にはやっていかなければいけないと思うのでかなり長く見ていかなければならない。とても大変な試験だと思いますのでよろしく願いします。

鏡 :

・法面の緑化について、今はどの種を使うかについての話ですが、そのあと緑化するとき、法面に吹き付けるやり方なのか、どのようにやるのか。先程お話にあったように、種子で繁殖しないものは移植しなければならないのかなと思ったので。あと、どのような可能性があるのか。

・もう一つは作業の進め方を具体的に知りたいのですが、室内で発芽の試験をされています。緑資源機構が、大規模林道の時にどうやっていたかという、彼らは地面に直播きしていた。現地の近くで活着の試験などをやっていた。そのようなやり方と室内でのやり方を比較したときにどのようなメリットがあるのか。

加賀屋 :

- ・それについては、実際に工事をやって行く段階で詰めていく必要があると思います。

建設管理部 :

・来年度、賦存量調査をやった上で、吹付などの工法についても切土盛土ありますのでこれから検討したいと思います。

鏡 :

- ・活着試験も検討しているのか

ズコーシャ :

・室内試験と現地試験の違いについて。室内試験は外来種対策として利用できるかどうかを選定する上で、まず一段階目として行っています。現地の試験は有効であるとは考えます。

・これから賦存量調査を実施します。候補種は挙がっていますが、実際に利用する種というのは現地にどれだけ種子があって、それがどれだけ結実しているかを調べた上で、法面がどのくらいの面積があったら、どのような導入方法が考えられるか。それらの検討をこれからしなければならないところです。それを踏まえて、本当に使う種、外来種対策として使う種を選定していくこととなりますので、現地試験をやるとすればその次の段階になるのかなと考えています。